

ほククテニの遺物は現在ヤツシ大學と伯林國立博物館に
所有されてゐることを附け加へて置かう。(角田文衛)

○維新政治宗教史研究

徳重 淺吉著

昨年五月、「維新精神史研究」の大著を公にされた大谷
大學教授徳重淺吉氏は、爾後未だ一年を経ざるに相繼い
て前著に劣らざる底の大冊を編み、題するに「維新政治
宗教史研究」の名を以てせられた。その精力の非凡なる
に驚歎するは敢て筆者に限らないであらうが、著者の近
來健康稍、勝れず臥床せらるゝこと多きを知る者に於て
その念は一層深いものがある。筆者はこの書を前にして
さながら著者の心血のそのよゝに凝固せるを見る心地し
て自ら頭の下るのを覺える。

本書の内容に就ては既に「社會經濟史學誌」上に牧健二
博士の要をえた紹介の載せられてゐるものがあり、限あ
る紙面に於て更に詳細に互ることは望まれないが、之を
要約すれば、「政治史の部面にありてはその運動の中核た

りし尊王攘夷論の本色を、宗教史の部面にありてはその
努力の目標たりし護法護國とそれに表裏膠着して離れざ
りし關那運動の實情を跡つけんとした」ものとする事
が出来た。就中後の問題の如きは從來未だ殆ど何人も手
をつけなかつた領域として著者によつて始めて教へらる
るところ頗る多い。而してその所論の基礎となつた資料
はまた悉く著者自らの努力によつて蒐集せられたもの、
近代の史料は何處にても行くに従つて拾ひうるかの如く
見えて、その實容易に見出し難いものなるを知るものは、
著者の自由に驅使する珍稀なる史料の影に如何ばかり大
きい努力のあつたかを見逃さないであらう。

最後に著者が自己の理想主義史觀の一看點として提示
せらるゝところの義認(Justification)といふこと、——人
が自己の行爲を正しきもの、義に協へるものと自ら信ず
る爲の論理は如何様の形をもとる、それは一般に「理想主
義的」ではあつても必ずしも常に歴史觀とは關はり有る
たないであらう。ただ正しき歴史觀の上に立つて過てる
行爲も亦意味ありしものと顧る歴史家の立場、ヘーゲル

の所謂和解の論理なるものは、著者のいふところの義認とは少しく意味を異にするものではなからうか、著者の教示を待つものである。(菊判七四六頁、東京目黒書店發行、定價六〇〇)

(柴田)

○明治前期財政經濟史料集成 第十五卷

大 藏 省 編

近時歴史學界に於て、種々なる立場からなされる教説的論講の多き中に、史料原典の上梓が續々企てられるのは殊に喜ばしき事としなければならぬ。その一である本集成は、去る昭和六年より大内兵衛、土屋喬雄兩氏の校正によりて刊行され始めてから既に豫定の大半を公にし、明治初年の社會經濟史的分野に最も基礎的な根柢的な寄與をなして來たのであるが、最近第十八回配本として第十五卷會社全書(上)が公刊された。

會社全書とはその解題に明らかであるが、維新當初我國が歐米先進諸國に伍せんが爲め、あらゆる産業部門に於て急速に資本主義化し近代化する必要に迫られ、新政

府の保護誘掖を蒙つて組織された各種の機關の内、明治二年通商司の監督下に創設された爲替會社に關する記録の一大集積である。即ち爲替會社は政府が特別な保護指導の下に三井小野島田その他の富豪を徳憑して組織せしめた我國最初の株式會社であり發券銀行の先驅者である。假令數年ならずして失敗に歸し、その實績は揚がらなかつたとはいへ、明治初年の會社企業として、金融機關として、我國資本主義發達史上に占める地歩は極めて大である。

本書はこの爲替會社に就いて明治二年の創立より廢止に至り明治九年金券引換の事務完了する迄の、回議書、報告書、日誌、勘定書並に各府縣との往復文書等、一切の文書記録を網羅して居り、原本は皆て大藏省文庫に收められしが、大正の大震災にて烏有に歸し、唯幸に三井家にその寫本を藏せるによりて印行せるもので、その絶大なる資料的價値がやがて更に歴史的價値に昂められる事を望むのである。

殊に本書は、その原本の構成が、約三回に亙る追録の